

## 《書評》

## 滝澤克彦『越境する宗教 モンゴルの福音派—ポスト社会主義モンゴルにおける宗教復興と福音派キリスト教の台頭』

新泉社、2015 年

藤本 透子\*

TAKIZAWA Katsuhiko, *Religion across borders: Rise of Evangelicals in the post-socialist Mongolia*, Tokyo, Shinsensya, 2015.

FUJIMOTO Toko

## 1. ポスト社会主義地域における「非伝統的宗教」の台頭

1990 年代以降、モンゴルから旧ソ連にかけての広い地域で、福音派やペンテコステ派のキリスト教が布教され、一部の人々のあいだで支持を拡大している。社会主義体制からの移行にともなって、宗教は急速に公的領域に姿を現したが、社会主義体制の成立以前からその地域で信仰されていた宗教のみならず、新たな宗教が広がったのはなぜなのだろうか。また、前者が「伝統的宗教」と呼ばれしばしば国家の保護を得てきたのに対し、後者は「非伝統的宗教」と呼ばれて現地で問題視されることも多いが、どのような人々が後者にひきつけられ、時に批判されながらも信仰を維持しているのはなぜなのであろうか。

本書は、宗教社会学を専門とする著者が、「越境」をキーワードとして、モンゴルにおける調査から福音派キリスト教の台頭という問題に取り組んだものであり、ポスト社会主義の宗教動態に新たな角度から光をあてている。これまで、旧ソ連を広く対象として非伝統的宗教への「改宗」という問題を取り上げた論集として Pelkmans 編（2009）があるものの、依然として研究は少ない。ポスト社会主義の宗教動態は、「伝統的宗教」と「非伝統的宗教」の両方を検討することによってその全体像が明らかになるのであり、これまで十分に分析されてこなかった「非伝統的宗教」の研究が進展することは喜ばしい。さらに、福音派キリスト教が世界的に布教活動を行っている

\*国立民族学博物館民族文化研究部

ことから、本書は現代における国境や民族を越えた布教とその受容に関する研究としても位置づけられる。

これまで評者は、旧ソ連領中央アジアの宗教動態について、特にカザフスタンにおけるイスラームに着目して人類学的研究を行ってきた。イスラームは1990年代に再活性化したが、その後、中東諸国など国外からのイスラーム布教を受容しながらカザフの伝統とイスラームの教義をいかに調和させていくのかが議論されてきた（藤本 2015）。カザフ人にとって「伝統的宗教」と位置づけられるイスラームですら、カザフ文化と相克する点があり調和が模索されているのであるから、キリスト教という異なる宗教への改宗は大きな軋轢を生むことであるに違いない。いわゆる「伝統的宗教」の再活性化と比較した場合、「非伝統的宗教」の布教とその受容は、どのような特徴をもつのであろうか。以下、第2節では本書の内容をレビューし、第3節では中央アジアと比較しながら宗教、移動、共同性の問題について今後の展望をまじえて論じる。

## 2. 既存の「民族」と「宗教」を越えて形成される共同性—各章における議論

本書の冒頭で著者は、信教の自由を獲得した人々の一部が「伝統的」な仏教ではなく別の宗教へ向かっていったのはなぜかと問いかけ、モンゴルにおけるキリスト教の台頭を「現代世界における『宗教の越境』の一つ」と定義する。つまり「流動性が増す現代世界のなかで『宗教』が国境や民族や言語を越えながら激しく移動し、常に新たにつながりや境界を生み出し続けるプロセスの一端」として、福音派キリスト教の台頭を位置づける。

これを受けて、第1章「福音派の越境をどう捉えるか」では、モンゴルにおける社会主義経験をもとにキリスト教の台頭を捉える理論的視座が示される。モンゴルでは、社会主義時代の大粛清によって仏教寺院が破壊・閉鎖され、僧侶は処刑あるいは還俗を余儀なくされ、宗教的要素を取り除いた民族文化が形成された。民主化により1990年に宗教が自由化されると、仏教は「半国教的な地位を獲得」し、少数民族のあいだでもシャマニズムやイスラームが復興を果たした。これらの既存の宗教に加えて、外国から入ってきた諸宗教が「宗教の競合」に新たに参入したが、そのなかで最も信者数が多いのが福音派のキリスト教で、2014年に信徒数は8～9万人に達したという。こうした状況をふまえた上で、著者は、宗教という概念自体が明確に境界のある対象ではない以上、「宗教の越境」も厳密に定義できるわけではなく、宗教に関連づけられるあらゆるものが「国家、民族、社会集団、言語、世界観などの位相において、境界を越えていく」という、「開かれた問題群としての『宗教の越境』」を対象とし、複数の位相のあいだの関係性も考慮しながら分析していくと述べる。

続く第2章「『民族』をどう越えるか」では、モンゴルにおける宗教と民族の関係が検討される。社会主義体制から移行後に、宗教は民族文化を構成する重要な要素と捉えられるようになったが、宗教とはモンゴル民族の「伝統的宗教」とみなされた仏教を指していたため、新たに登場したキリスト教などの外国の宗教は「非伝統的宗教」というレッテルをはられ、批判的なまなざしを向

けられた。ソ連と中国という二つの大国に挟まれながら独立を維持してきたモンゴルでは、民族の消滅に対する危機感は強く、キリスト教がモンゴルに浸透するには困難が伴ったという。

ここで興味深いのは、「宗教」「キリスト教」「神」の訳語をめぐる論争である。モンゴル語で「宗教」の訳語にあてられたのは「シャシン」という単語だが、福音派は「宗教」ではなく「信仰」で神との直接的な「関係」とであると主張し、キリストの信仰を意味する「クリストイトゲル」という造語を自称とした。このことは、仏教を強く含意する「シャシン」という単語を使わないことで民族と宗教の位相をいったん切り離し、キリスト教への改宗が民族文化の否定ではないという主張へとつながっていると著者は指摘する。また、キリスト教の「神」の翻訳をめぐって、「世界の主」を意味する「ユルトウンツィーン・エゼン」という新しい熟語と、仏を意味する「ボルハン」が競合している。一部の教会指導者には、外国人宣教師の統制を離れてモンゴル独自の教会を求める志向があり、「ボルハン」という訳語を用いることに民族主義が込められているという。つまり、キリスト教の信仰のもとでの民族主義を追求しており、これを著者はスターリンのスローガン「内容において社会主義的、形式において民族的」をもじって「内容においてキリスト教的、形式において民族的」と形容するのである。

第3章の「『宗教』をどう越えるか」というタイトルはややわかりづらいが、ここでいう「宗教」とは仏教的ニュアンスを残した宗教観念や宗教実践を指していると考えられる。具体的には、福音派キリスト教徒となったモンゴル人の家族や親族との関係が家庭内祭祀を中心に論じられる。著者によれば、現代モンゴルでは集団的な祖先祭祀が存在せず墓参の習慣もないため、家庭内祭祀の社会的意義が際立つ。家庭内祭祀には、仏教が「伝統」や「習慣」として深く埋め込まれてきたため、その仏教的ニュアンスをいかに排除するかが教会指導者にとって課題となっている。家庭内祭祀はもともと専門家を必要とせず、社会主義時代に反宗教政策がとられていたことによって世帯ごとの個別化の傾向を強め、仏像がなくとも遺影を置くという形態も一般化した。しかし、キリスト教が個人の信仰に重きをおくのに対して、家庭内祭祀は家族関係のなかにあるため、家族のひとりのみキリスト教徒となったような場合に、家庭内祭祀は信徒にとって「葛藤の場」となりやすい。例えば、仏像の破棄をめぐる問題などが生じるのである。

葛藤の解決を模索する信徒にとって、家庭内祭祀は「自己表現の場」ともなっている。ある女性は、屋外で天に対して献茶をすることを「世界の主」に対する行為と解釈して行っている。また、ある男性はゲルの上座に十字架をかけており、ゲル内における空間認識がキリスト教の信仰をとおして再生産されている。また、別の女性は、子どもの死をきっかけに仏像を集め「狂ったように祈る」ようになり周囲も困り果てたが、教会に行くようになって「すっかりよかった」と語る。彼女は、キリスト教徒となって仏像や仏具をすべて寺にもっていき破棄したが、子どもの遺影は置き続けている。遺影に対する焼香や献灯はキリスト教に反すると語る牧師も、彼女の家の遺影をあえてとがめようとはしないという。

こうした具体的な事例から、家庭内祭祀が葛藤を表現し調整していく現場であり、逆に家庭内祭祀の変容は家族関係にもなんらかの変容を促すと著者は指摘する。夫が熱心な仏教徒で妻がキ

リスト教徒となった場合に葛藤は最も大きい、熱心な女性信徒が主体となって仏像を破棄することで家庭内における主導的立場を強めていくことも多く、これは女性が高い社会的地位を占める現代モンゴル社会のジェンダーの一端を示しているという。福音派のキリスト教徒となった人々が「伝統」として日常生活に埋め込まれた仏教といかに向き合い、家族や親族との新たな関係を模索していくのかは、後述する中央アジアとの比較からも注目される点である。

続く第4章「越えて結ばれるもの」は、教会や家庭集会をとおして共同性がどのように形成されるのかを論じた最も充実した章で、「救いの共同性」という概念が提起される。著者によれば、仏教は「民族」や「国家」という「想像の共同体」を支える基盤となろうとしてきたが、人々の仏教的実践には自律的な傾向が強い。これに対して福音派は、信仰内容ではきわめて個人主義的傾向が強く救いの対象はあくまで個人であるが、その一方で教会は仏教にはない強い集団性を有する。キリスト教の信徒集団には信仰にもとづく排他的なメンバーシップがあり、それは日曜礼拝や家庭集会をとおして維持される。

教会はさまざまな援助活動を実施するために「実利的」との非難を受けてきたが、「実利的な関心」と「本当の信仰」を二律背反的なものとして捉えることを著者は批判する。教会の活動資金は外国の教会や国際宣教機関の援助によってまかなわれており、援助は外国の教会からモンゴルの中心的な教会へ、さらに大教会から支部教会へと流れる。援助活動は宣教などの目的を持った行為ではなく、それ自体が神の命じるままの行為と捉えられている。また、教会の運営に対して援助や寄付が多く集まることは「神の慈悲」として受けとめられるという。援助を目的に教会に来ている人たちは援助が切れると教会から離れていくが、援助を目的としていた人たちが内面的変化を経験して信者となることもある。ただし、これを「援助から信仰への進展とみなすことは一面的」とであると著者は慎重に述べる。

それでは、援助などによる現実的な救済は、人々の信仰的な「救い」とどのように関係しているのか。著者によれば、福音派は特徴的な「祈り」の実践によって、他の宗教とは異なる特有の連帯感の上に集団を形成している。例えば、日曜礼拝における祈りをとおして教会全体で共有される高揚感は、人々を強く引き付ける要素の一つである。さらに、「細胞集会」と呼ばれる家庭集会では、病気の治癒、学業や事業の成功、経済的な安定、家族の不和の解決など具体的な祈りを声に出して共有し、場合によっては現実的な解決策を見出していく。祈りによる問題の共有をとおして、信徒は一種の相互扶助組織を形成するという。福音派の信徒の多くは、地方から都市に移住してきた人々であり、居住許可を得て住居を構えることも、近隣に信頼できる知り合いを得ることもきわめて難しいが、家庭集会が社会関係資本を生み出す基盤となっている。このため、信仰は、教会からの利益の享受と結び付きながら並存している。多くの信徒が教会に通うようになって生活が改善したと感じ、その改善は「神の慈愛、救い、信仰、祈り」によるものと認識している。援助による生活状況の改善が信仰を深める契機となるという循環があり、信仰の位相と現実的な救済という経済的な位相は、別の次元にありながら関連し合っていると著者は指摘する。

さらに、祈りによる直接的かつ奇跡的な治癒が、福音派教会を特徴づけている。教会はさまざまな医療サービスも行っており、例えば現代モンゴルを代表する社会問題であるアルコール中毒の治療に関して一定の評価を得ている。福音派は病気を、身体的位相だけではなく、信仰的位相との交錯点に位置づけることが多く、「病気の治癒」についても信仰との循環関係があてはまるという。

著者によれば、こうした教会の実利的側面は「本当の信仰」を強化していくと同時に、信仰の深まりが教会をより実利的にしていく。「改宗」による「新しい人間」への変化が救いの体験という証によって確認されるという一連の物語は、救いを求める他の信徒たちの「祈り」を生成する。この循環的なプロセスが彼らの集団性の核心にあり、「救いの共同性」が生み出されると著者は主張する。この共同性は特定の集団に対する帰属意識ではなく、個人的な信仰にもとづいているためにきわめて流動的な性格をもつという。

国境を越えて移住した人々のあいだでも、この流動的な性格をもつ「救いの共同性」は重要な役割を果たすとして、最後に著者は在外モンゴル人の教会を分析している。最大の国外出稼ぎ先である韓国で、在韓モンゴル人のネットワークおよびコミュニティ形成に福音派キリスト教の教会が果たした役割は非常に大きい。在韓モンゴル人数が減ると教会における集会数も減少した。これに対して、米国における教会は、在米モンゴル人のあいだでより恒常的な活動を展開している。在米モンゴル人教会には韓国人牧師が関わっている場合が多いが、教会は「モンゴル人たちの交流の場」であり、民族を超えたネットワークの結節点としても機能する。「改宗」がアメリカ社会への適応を促進する一方で、教会はモンゴル人が民族的アイデンティティを確かめ合う場ともなっており、実際に多くのモンゴル文化が仏教的要素をそぎ落とすることで在米モンゴル人教会の活動に取り込まれているという。このように国外への移動にともなう「非伝統的宗教」の台頭は、国外への移住後の「伝統的宗教」の展開と照らし合わせながら今後さらに研究されていくべき広がりをもったテーマであるだろう。

終章「福音派の越境が意味するもの」は、短い重要な指摘を含む。著者は「福音派の特徴は、特定の位相上にひかれた境界の越境というよりは、さまざまな位相のあいだを横断していく能力にあるように思われる。(中略)『祈り』と『救い』という比較的単純な関係を軸に、個人と個人を結び付け、位相のあいだを飛躍しながら広がっていくことが可能なのである」と指摘する。その一つの例が、福音派が「信仰の問題を『個人と神との直接的な関係性』という『民族』とは異なる位相に捉え直すことで、もう一度、『民族』を『信仰』に結び付けることを可能にしている」ことなのである。

民主化以降に福音派が受け入れられていく前提となったのは、著者によれば、社会主義の意図せざる帰結であった。福音派の広がり、社会主義時代に進行した宗教の個別化傾向の延長上にあるが、福音派では個別化が家庭のレベルを越えて個人のレベルまで達しており、それが新たな共同性につながっている。つまり、ポスト社会主義の宗教状況は、モンゴルにおける社会主義経験によって形成されたローカリティの再編プロセスとして展開したと著者は指摘する。その上

で、福音派は「既存の宗教には見られなかったような、個人の祈りの共有を通した『救いの共同体』を生み出してきた。人を強力に個別化していくと同時に結び合わせていく福音派の社会的特性は、国内／国際移動や失業などさまざまな理由で孤立している人々を強くひきつけていくことになった」と結論付けている。『『ポスト社会主義』のローカリティが福音派を強力に文脈化していくのか。それとも、グローバルな波がそのようなローカリティを徹底的に打ち崩していくのか』と今後の展開を問いながら、福音派の動きはモンゴルを取り巻く世界の状況を理解するときの一つの鍵であると著者は本書を結んでいる。

以上のように、本書はモンゴルにおける福音派キリスト教の台頭を丹念に読み解いている。「民族」や「宗教」の観念をめぐる議論がやや錯綜して読みづらい箇所もあるが、福音派による民族と宗教の捉え方自体が戦術的な側面も含む試行錯誤の連続であることが、具体的な記述と分析から浮かび上がる。ポスト社会主義地域における新たなキリスト教の台頭について、市場経済化による格差の拡大や国内／国際移動の影響の方が強いように評者には思われるが、社会主義にもとづく近代化が一定の重要な影響を及ぼしたことも確かであろう。モンゴルの福音派が、宗教、民族、経済といった多くの位相を、祈りと救いをキーワードに新たに切り結んでいくという著者の分析は、以下で述べるように広く比較の視点からも注目される。

### 3. 宗教、移動、共同性の問題によせて—中央アジアとの比較の視点から

本書でモンゴルの事例から明らかにされた「宗教の越境」のメカニズムは、社会主義を経験した他地域とも比較することで、より広く検証されていくことが可能になるだろう。限定的ではあるが、ここで旧ソ連、特に中央アジアの事例と比較検討を試みる。

中央アジアでは各国の基幹民族の伝統の一部としてイスラームが復興しが、これはナショナリズムと「伝統的宗教」の結びつきという点で、モンゴルにおける仏教の再活性化と類似の現象として捉えられる。「伝統的宗教」の再活性化の一方で、国外から布教された「非伝統的宗教」が台頭した点も共通する。モンゴルでは福音派のキリスト教が広がりを見せたが、中央アジアでも少数とはいえ福音派やペンテコステ派のキリスト教に入信する人々が現れたのである。

ただし、次に述べるように、地域社会におけるキリスト教の位置づけはかなり異なる。旧ソ連では複数の「宗教」が公認されていたため、宗教はある程度まで抽象的概念として成立していると考えられる。例えば、カザフ語の「宗教」(*din*, デイン)は一義的にはイスラームを指すが、ロシア語のレリギヤ (*religiya*) の訳語としても使われ、キリスト教などほかの宗教も含めてさしうる。「私たちの宗教 (デイン) はイスラームだ」という言い方があることは、別の宗教の存在を前提としたものといえよう。中央アジアではロシア正教がイスラームに次ぐ勢力であり、中央アジアのムスリムにとっては、キリスト教は「ロシア人の宗教」というイメージが圧倒的に強い。

その一方で、聖書はムスリムにとっても啓典であり、イエスがムハンマドに先行する預言者の一人とみなされるなど、イスラームとキリスト教に一定の共通性があることは、モンゴルにおけ

る仏教とキリスト教の関係とは大きく異なる。このため、中央アジアにおけるペンテコステ派や福音派キリスト教の布教は、イスラームとの共通性を前面に出しながら行われた。カザフスタンでカザフ人やウイグル人移民における福音派の活動を分析したクラークは、イエスを預言者イサと呼び変え、改宗を「イサを受け入れる」と呼ぶなどの工夫が、キリスト教の受容を可能にしていることを指摘している。キリスト教の聖金曜日をイスラーム祭日に行い、イースターを中央アジアの伝統的新年であるナウルズの際に祝うなど、キリスト教を中央アジアの文脈で読み替える「文脈化 (contextualization)」も進展している (Clark 2009: 133-141)。

こうした文脈化によって、中央アジアのムスリムは連続性の意識をもってキリスト教を受容する。しかし、ウズベキスタンで調査したラサナヤガムによれば、福音派キリスト教を受容したムスリムは、政府が「正統」と認めていないイスラームを信仰していると周囲から見なされ非難された (Rasanayagam 2011: 148)。また、クルグズスタンでペンテコステ派のキリスト教徒の調査を行ったペルクマンズは、信者本人は連続性の意識を持っていたとしても、周囲からは「改宗者」とみなされて非連続性が強調されることを指摘している。例えば、移住先の町で入信したクルグズ女性は、故郷に帰ると親族に非難されたため教会から離れ、「改宗」は「一時的」なものに終わったのである (Pelkmans 2009: 157-158)。

注目されるのは、中央アジアでも村落部から都市への移住者や国外からの移住者が、福音派やペンテコステ派キリスト教の主要な信者となっている場合が多いことである。それまでの社会的紐帯から切り離された人々にとって、教会のネットワークは移住先で社会生活を再構築する際の拠りどころとして重要である。旧ソ連における福音派の布教の拠点であるウクライナで調査したワンナーは、福音派を「旅する文化」と位置づけ、国境を越えて「移動する自己」として、福音派のキリスト教徒となることはどこに移住しても居場所を提供してもらえるという利点があると指摘している (Wanner 2009: 169-178)。このように、社会主義経験の影響に加えて、より直接的には国内・国際移動の増大が、福音派などのキリスト教が受容される上で重要な要因となったとみられる。

旧ソ連の移民のあいだで、福音派やペンテコステ派のキリスト教をとおして共同性が生み出されていくプロセスについては、家庭集会が社会的紐帯の要であることや、援助および治療活動が重要な要素となっていることが指摘されている (Pelkmans 2006, 2009, Clark 2009)。しかし、本書におけるモンゴルの事例ほどには精査されておらず、位相を横断しながら「救いの共同体」が形成されるというメカニズムが、中央アジアのムスリム社会や、より広く旧ソ連の諸社会にも適応されるのか、さらなる比較検討が必要とされる。また、救いが与えられていないと信徒が感じたとき、つまり祈りと救いの循環が崩れてしまった場合や、あるいは移住先から故郷へと戻った場合にどのような選択がなされるのかも、今後さらに広く検討されていくべき課題である。

現代における人の移動の増大によって、移住先で共同性の再構築が必要とされる状況は増えており、「伝統的宗教」もまた連続性のもとで自らを変革しながら共同性を生み出している (Yamada & Fujimoto forthcoming)。都市への移民が葛藤しながら既存の位相の境界を越え、祈りと救いの

192 藤本 透子：滝澤克彦『越境する宗教 モンゴルの福音派—ポスト社会主義モンゴルにおける宗教復興と福音派キリスト教の台頭』

循環に基づく新たな共同性を生み出すという本書の指摘は、ポスト社会主義地域にとどまらず、広く現代における宗教と共同性の問題を考える上で示唆に富んでいる。

## 引用文献

Clark, William

2009 Networks in Faith in Kazakhstan. In Pelkmans, Mathijs (ed.) *Conversion after Socialism: Disruptions, Modernisms and Technologies of Faith in the Former Soviet Union*, pp. 129-142. New York & Oxford: Berghahn Books.

Pelkmans, Mathijs (ed.)

2009 *Conversion after Socialism: Disruptions, Modernisms and Technologies of Faith in the Former Soviet Union*. New York & Oxford: Berghahn Books.

Pelkmans, Mathijs

2006 Asymmetries on the Religious Market in Kyrgyzstan. In Hann, Chris & the "Civil Religion" Group (eds.) *The Postsocialist Religious Question: Faith and Power in Central Asia and East-Central Europe*. Berlin: LIT.

2009 Temporary Conversion: Encounters with Pentecostalism in Muslim Kyrgyzstan. In Pelkmans, Mathijs (ed.) *Conversion after Socialism: Disruptions, Modernisms and Technologies of Faith in the Former Soviet Union*, pp.143-162. New York & Oxford: Berghahn Books.

Rasanayagam, Johan

2011 *Islam in Post-Soviet Uzbekistan: The Morality of Experience*. Cambridge: Cambridge University Press.

Wanner, Catherine

2009 Conversion and Mobile Self: Evangelicalism as 'Traveling Culture.' In Pelkmans, Mathijs (ed.) *Conversion after Socialism: Disruptions, Modernisms and Technologies of Faith in the Former Soviet Union*, pp. 163-182. New York & Oxford: Berghahn Books.

Yamada, Takako & Toko Fujimoto (eds.)

(forthcoming) *Migration and the Remaking of Ethnic/Micro-Regional Connectedness. (Seri Ethnological Studies)*. Osaka: National Museum of Ethnology.

藤本透子

2015「移動が生み出すイスラーム動態—国境を隔てたカザフ社会の再編過程から」藤本透子編『現代アジアの宗教—社会主義を経た地域を読む』 pp.131-194. 東京：春風社。